Mission
３０分で１２／２０点を突破せよ！

第七講　過去問実践演習　２０１４年第四問

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

　仕事の打ち合わせでだれかとはじめて顔を合わせるとき。そんなときには、互いに、見えない触覚を伸ばして話題を探すことになる。もともとは苦手だったそういう事柄が、いつからか嫌でなくなり、いまでは愉(たの)しいひとときにすらなってきた。どのみち避けられないから、嫌ではないはずと自己暗示を掛けているだけかもしれない。いずれにしても、初対面の人と向かい合う時間は、ア<u>日常のなかに、ずぶりと差しこまれる</u>。

　先日は、理系の人だった。媒体が児童向けで、科学関係の内容を含むためだった。もちろん、それは対話を進めているうちにわかってくることだ。互いに、過不足のない自己紹介をしてから本題に入る、などということは起こらない。相手の話を聞いているうちに、ずいぶん動植物に詳しい人だなという印象が像を結びはじめる。もしかして、理系ですか、と訊(き)いてみる。

「ええ、そうです。いまの会社に来る前は、環境関係の仕事をしていま

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

Anatomy of Victory　本文分析

した。それもあって、いまの仕事でも植物や動物を取材することが多いんです。この前は蓮田（はす）に行ってきました。蓮根を育てている蓮田です。蓮って、水の中の根がけっこう長いんですよ。思ったよりずっと長くて、びっくり。動物園に行くこともありますよ。撮影にゾウの糞が必要で、ゾウがするまで、じっと待っていたりして」。嬉々（きき）として説明してくれる。だれと会うときでも、相手がどんなことにどんなふうに関心をもっているのか、知ることは面白い。自分には思いもよらない事柄を、気に掛けて生きている人がいると知ることは、知らない本のページをめくる瞬間と似ている。

　私たちの前にはカフェ・ラテのカップがあった。その飲み物の表面には、模様が描かれていた。その人は、自分のカップの上へ、首を伸ばすようにした。そして、のぞき見ると「あ、柄が崩れてる」といった。「残念、崩れてる」と繰り返す。私の方は崩れていない。崩れていても一向に構わないので、それならこちらのカップと交換しようと思った瞬間、その人は自分の分を持ち上げて、口をつけた。申し出るタイミングを失う。相手への親近感が湧いてくる。以前から知っている人のような気がしてくる。

「台風の後は、植物園に直行するんです」。相手は、秘密を打ち明けるように声をひそめる。「その植物園には、いろんな種類の松が植わっていて。台風の後は、こんな大きい松ぼっくりが拾えるんです」。両手で大きさを

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

Mission
３０分で１２／２０点を突破せよ！

示しながら説明してくれる。「それを、リュックに入れて、もらってくるんです」。いっしょに行ったわけではないのに、いつか、そんなことがあった気がする。いっしょに、松ぼっくりを拾った気がする。植物園もまた本に似ている。イ風が荒々しい手つきでめくれば、新たなページが開かれて、見知らぬ言葉が落ちている。植物園への道を幾度も通うその人のなかにも、未知の本がある。耳を傾ける。生きている本は開かれないときもある。こちらの言葉が多くなれば、きっと開かれない。

　その人の話を、もっと聞いていたいと思った。どんぐりに卵を産みつける虫の名前を、いくつも挙げられるような人なのだ。打ち合わせだから当然、雑談とは別に本題がある。本題が済めば、店を出る。都心の駅。地下道に入ると、神奈川県の海岸の話になった。相手は、また特別な箱から秘密を取り出すように、声をひそめた。「あのあたりでは、馬の歯を拾えるんです。海岸に埋められた中世の人骨といっしょに、馬の骨も出てくるんです。中世に、馬をたくさん飼っていたでしょう。だからです。私、拾いましたよ、馬の歯」。

「それ、本当に馬の歯ですか」。思わず問い返す。瞬間、相手は、ううんと唸（うな）る。それから「あれは馬です、馬の歯ですよ。本当に、出るんです」。きっぱり答えた。記憶と体験を一点に集める真剣さで、断言した。その口

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

Anatomy of Victory　本文分析

からこぼれる言葉が、一音、一音、遠い浜へ駆けていく。たてがみが流れる。大陸から輸送した陶器のかけらが出るという話題なら珍しくない。事実なのだ。けれど、馬の歯のことは、はじめて聞いた。それから、とくに拾いたいわけではないなと気づく。拾えなくてもいい。ただ、その内容そのものが、はじめて教えられたことだけが帯びるぼんやりとした明るさのなかにあって、心ひかれた。

拾えなくていいと思いながら、馬かどうか、時間が経っても気になる。その人とは、本題についてのやりとりで手いっぱいで、馬の歯のことを改めて訊く機会はない。脇へ置いたまま、いつまでも、幻の馬は脇に繋（つな）いだままで、別の対話が積み重なっていく。馬なのか、馬だったのか、確かめることはできない。

ある日、吉原幸子の詩集『オンディーヌ』（思潮社、一九七二年）を読んでいた。これまで、吉原幸子のよい読者であったことはないけれど、必要があって手に取った。愛、罪、傷など、この詩人の作品について語られるときには必ず出てくる単語が、結局はすべてを表しているように思いながら読み進めるうち、あるページで手がとまった。「虹（にじ）」という詩。その詩は、次のようにはじまる。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

Mission
３０分で１２／２０点を突破せよ！

どうしたことか　雨のあとの
立てかけたやうな原っぱの斜面に
ぶたが一匹　草をたべてゐる
電車の速さですぐに遠ざかった
（うしでもやぎでもうさぎでもなく）
あれは　たしかにぶただったらうか

なんとなく笑いを誘う。続きを読んでいくと「こころのない人間／抱擁のない愛――」という言葉が出てきて、作者らしさを感じさせる。周囲に配置される言葉も、その重さのなかでぴしりと凍るのだけれど、それでも、第一連には紛れもない可笑(おか)しみがあって、この六行だけでも繰り返し読みたい気もちになる。あれは、なんだったのだろう。そんなふうに首を傾(かし)げて脳裡(のうり)の残像をなぞる瞬間は、日常のなかにいくつも生まれる。多くのことは曖昧(あいまい)なまま消えていく。足元を照らす明確さは、いつでも仮のものなのだ。そして、だからこそ、輪郭の曖昧な物事に輪郭を与えようと一歩踏み出すことからは、光がこぼれる。ウ その一歩は消えていく光だ。「虹」という詩の終わりの部分を引用しよう。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

Anatomy of Victory　本文分析

いま　わたしの前に
一枚のまぶしい絵があって
どこかに　大きな間違ひがあることは
わかってゐるのに
それがどこなのか　どうしてもわからない

消えろ　虹

　言葉の上に、苛立(いらだ)ちが流れる。わかることとわからないことのあいだで、途方に暮れるすがたを刻む。鮮度の高い苛立ちがこの詩にはあり、それに触れれば、どきりとさせられる。わからないこと、確かめられないことで埋もれている日々に掛かる虹はどんなだろう。それさえも作者にとっては希望ではない。消えろ、と宣告するのだから。

　拾われる馬の歯。それが本当に馬の歯なら、いつ、だれに飼われていたものだろう。どんな毛の色だったか。人を乗せていただろうか。あるいは荷物を運んだのだろうか。わかることはなにもない。その暗がりのなかで、ただひとつ明らかなことは、これはなんだろう、という疑問形がそこにはあるということだ。問いだけは確かにあるのだ。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

Mission
３０分で１２／２０点を突破せよ！

問いによって、あらゆるものに近づくことができる。だから、問いとは弱さかもしれないけれど、同時に、もっとも遠くへ届く光なのだろう。「馬の歯を拾えるんです」。その言葉を思い出すと、蹄（ひづめ）の音の化石が軽快に宙を駆けまわる。遠くへ行かれそうな気がしてくる。松ぼっくり。馬の歯。（エ）掌にのせて、文字のないそんな詩を読む人もいる。見えない文字がゆっくりと流れていく。

（蜂飼耳「馬の歯」）

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

㈠「日常のなかに、ずぶりと差しこまれる」（傍線部ア）とはどういうことか、説明せよ。

㈡「風が荒々しい手つきでめくれば、新たなページが開かれて、見知らぬ言葉が落ちている」（傍線部イ）とはどういうことか、説明せよ。

㈢「その一歩は消えていく光だ」（傍線部ウ）とはどういうことか、説明せよ。

㈣「掌にのせて、文字のないそんな詩を読む人もいる」（傍線部エ）とはどういうことか、説明せよ。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

㈣	㈢	㈡	㈠

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

Ⓒ RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第七講　過去問実践演習

２０１４年　第四問　蜂飼耳「馬の歯」

要旨

　初対面の人と会うとき、未知の世界を切り開く新たな疑問が得られる時がある。それは本を読むのと似ている。また、自然においても同様のことがある。そして、人は疑問を明らかにしようと試みるが、一度明らかになったことも仮説に過ぎず、いずれは否定される。しかし、そのような疑問を持つことによって、人はより世界が広がっていくのである。

解答（20点）

㈠（5点）

話題探しを愉しむか、嫌でないと思いこんで初対面の人と向き合う時間は、日常的理解を揺るがす事柄を知る契機になるということ。

解答ポイント

① 話題探しを愉しむか、嫌でないと思いこんで初対面の人と向き合う時間（3点）

② 日常的理解を揺るがす事柄を知る契機になる（2点）

㈡（5点）

本と同様植物園においても、意図せざるものと向き合うと、未知の世界が広がり、自分には思いもよらない事柄が見つかるということ。

解答ポイント

① 本と同様植物園においても（2点）

② 意図せざるものと向き合うと（1点）

③ 未知の世界が広がり、自分には思いもよらない事柄が見つかる（2点）

㈢（5点）

曖昧な未知のものを明確に理解しようとしても、現在明確になったことは仮説に過ぎず、いずれ否定されるものだということ。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

解答ポイント

①　曖昧な未知のものを明確に理解しようとしても（2点）
②　現在明確になったことは仮説に過ぎず（2点）
③　いずれ否定されるものだ（1点）

㈣（5点）

自分の意図を超えた自然と向き合い、日常的理解と未知のものの間で問い続けることで、新たな知を切り開く人もいるということ。

解答ポイント

①　自分の意図を超えた自然と向き合い（2点）
②　日常的理解と未知のものの間で問い続ける（2点）
③　新たな知を切り開く人もいる（1点）

解説

㈠　**傍線部内容説明問題**

傍線部のわかりにくい部分を、詳しくわかりやすく説明する問題である。傍線部を含む一文を分析すると、「いずれにしても」という指示語を含む表現、「日常のなかに、ずぶりと差しこまれる」という比喩表現がそれぞれポイントであることがわかる。よって、これらのポイントを説明する根拠を本文中に求める。

まず、「いずれにしても」であるが、「AまたはB」のどちらでも良いということである。よって「AまたはB」に相当するものを捉える。Aは第一段落三文目「もともとは苦手だったそういう（＝話題を探す）事柄が、いつからか嫌でなくなり、いまでは愉しいひとときにすらなってきた」である。Bは同段落四文目「どのみち避けられないから、嫌ではないはずと自己暗示を掛けているだけかもしれない」である。これをまとめると①「話題探しを愉しむか、嫌でないと思いこむ」となる。

次に「日常のなかに、ずぶりと差しこまれる」という比喩表現であるが、「初対面の人と向かい合う時間」が「日常」のなかに「何を」もたらすのかを求めるとよい。すると、第三段落十二文目に「自分には思いもよらない事柄を、気に掛けて生きている人がいると知る」とある。つまり、②「初対面の人と向かい合う時間」が「日常」のなかに、「自分には思いもよらない事柄」があることを教えてくれるのである。

以上のポイントをまとめて解答を構成するとよい。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

(二) 傍線部内容説明問題

傍線部のわかりにくい部分を、詳しくわかりやすく説明する問題である。傍線部を分析すると、「風が荒々しい手つきでめくれば」という比喩表現、「新たなページが開かれて、見知らぬ言葉が落ちている」という比喩表現がそれぞれポイントであることがわかる。よって、それらのポイントを説明するための根拠を本文中に求める。

まず、「風が荒々しい手つきでめくれば」であるが、第五段落一文目に「台風の後は、植物園に直行するんです」とある。傍線部の「風」は「台風」であり、「荒々しい手つきでめくる」というのは「本をめくる」ということに喩えているのである。喩えられているものは、同段落九文目「植物園もまた本に似ている」にもあるように「植物園」である。ここに「類似」の構造があることから、①「植物園」と「本」の類比を説明する問題であるとわかる。「台風」と「未知の本」の類似点は何かというと②「意図せざるもの」である。

次に「新たなページが開かれて、見知らぬ言葉が落ちている」という比喩表現である。「植物園」には同段落四文目十文目「こんな大きい松ぼっくり」が「落ちている」のであるが、「本」との類比表現になるように一般化しなければならない。そこで「本」の説明がある第三段落十二文目をみる。「自分には思いもよらない事柄を、気に掛けて生きている人がいると知ることは、知らない本のページをめくる瞬間と似ている」とあることから、③「新たな世界が開かれて、自分には思いもよらない事柄」が発見できるという意味であることがわかる。

以上のポイントをまとめて解答を構成するとよい。

(三) 傍線部内容説明問題

傍線部のわかりにくい部分を、詳しくわかりやすく説明する問題である。傍線部を分析すると、「その一歩」という指示語、「消えていく光」という比喩表現がそれぞれポイントであることがわかる。よって、これらのポイントを説明するための根拠を本文中に求める。

まず「その一歩」であるが、第十段落八文目に①「輪郭の曖昧な物事に輪郭を与えようと一歩踏み出すこと」である。

次に「消えていく光」であるが、「輪郭の曖昧な物事に輪郭を与えようと一歩踏み出すことからは、光がこぼれる」の光である。「消えていく」という部分は同段落七文目に②「足元を照らす明確さは、いつでも仮のもの」であり、同段落六文目にあるように③「多くのことは曖昧なまま消えていく」。「輪郭の曖昧な物事に輪郭を与えようと一歩踏み出すこと」

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

によって、「足元を照らす明確さ」が得られたように思うが、それは「いつでも仮のもの」であり、「曖昧なまま消えていく」のである。

以上のポイントをまとめて解答を構成するとよい。

㈣　傍線部内容説明問題

傍線部のわかりにくい部分を、詳しくわかりやすく説明する問題である。傍線部を分析すると、「掌にのせて」の省略された目的語、「文字のないそんな詩を読む人」という比喩表現がそれぞれポイントであるとわかる。よって、それらのポイントを説明するための根拠を本文中に求める。

まず「掌にのせて」の省略された目的語であるが、第十三段落六文目七文目に「松ぼっくり。馬の歯」とある。これは「理系の人」の話に出てきたものである。よって、①「自分には思いもよらない事柄＝自然」に向き合う人だとわかる。

次に「文字のないそんな詩を読む人」であるが、詩の内容は、第十一段落二文目にあるように「わかることとわからないことのあいだで、途方に暮れるすがたを刻む」ものである。また、「馬の歯」の話の中にも、第十二段落七文目にあるように「その暗がりのなかで、ただひとつ明らかなことは、これはなんだろう、という疑問形がそこにはあるということだ」と②「疑問」があることがわかる。

さらに、「疑問」について第十三段落一文目に「問いによって、あらゆるものに近づくことができる」と説明がある。また、同段落二文目にも「問いとは弱さかもしれないけれど、同時に、もっとも遠くへ届く光なのだろう」とある。「問い＝疑問」とは苛立つものではあるが、同時に③「最も遠くへ届く光＝未知のものが明確になる」契機であるという意味である。これが「文字のないそんな詩」である。

以上のポイントをまとめて解答を構成するとよい。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。